

点描

北海道50年の歩み—真宗同朋会運動—

No.21

1978
昭和53年第1期・第2期北海道教学研究
所長を務めた仲野良俊氏(写真左)

教団問題と公議公論を求めて

「清沢教学」批判に応えた教学者(下)

北海道教学研究所は、一九七三年(昭和48)、仲野良俊氏を所長に迎え、全国初の教区の研究機関として開設された。

その契機を開いたのは、前年に実施された伝道研究所であったと伝えられる。対象は25歳から35歳までの教師、人員は10名、会場は北海道本堂で五日間の合宿生活であった。このスタイルが現在も続く教研の原形となっている。

寺澤長麿氏から教研開設の提案を受けた春田義正教務所長は、寺澤、加藤眞、白井豊賢、山本良超、秋山誠、佐藤隆玄、元氏義照の各氏に構想立案を依頼し、教団問題によつて左右される本山の教研分室ではなく、独立した北海道教学研究所として開設に至った。

*

仲野氏は、所長として二期六年、毎月京都と札幌を往復し青年僧侶の育成に情熱を傾け、さらに三期と五期の六年、倒れるまで専任講

師として講義を続けられた。

その第二期(一九七六〜七九年)は、大谷光暢本願寺住職が大谷派に訣別し、本願寺を独立せしめる旨の声明を発するなど、緊迫した状況が連続していた。

一九七八年(昭和53)11月の教研の研究集会では、教団問題を討議し、11月15日、仲野良俊北海道教学研究所長、金石晃道所員の連名による見解を表明し、『北海真宗』にその全文が掲載された。

表題は「本願寺住職大谷光暢師の声明に対し深い悲しみをこめて見解を披瀝する」。

教研が黙視できなかったのは、「私の真意を取って理解しようとならない一部改革派僧侶」、「彼ら改革派の源流は、明治期の哲学者清沢満之であり、本願寺の伝統の教義・信仰とは全く異質のもの」とする発言である。

教研の見解は、本願寺住職の声明を「我是」に立つた発言であるとし、「一部改革派」と位置づけることに對しては、宗門の大多数の切なる願いに支えられているのが現内局であることを、未だお解りにならないのか、と喝破する。そして、清沢満之は宗門にとつ

て単なる哲学者であったのかどうか、と問う。

「清沢満之ほど宗門に對し揺らぐことのない信頼を持ち続けた人はいない。この清沢満之を持ったことにより、わが大谷派は存在の意義を辛うじて保つことを得たといふべきである。

自ら求道聞法し、本願念仏の教えを人類の灯として世に捧げている、この一点において機能するところが大谷派教団が現在に存立する意味を持つ。

宗祖の御精神に回歸しようとする求道の伝統を排除して「本願寺の伝統」といわれても、ただ空しいひびきを残すのみ。それが如何なる事情の中であるにせよ、このたびのあなたの声明は、宗祖親鸞の教えの下に求道聞法する私共の断じて容認し難いものであることを表明する」と結んでいる。

教団問題が苛烈な段階に入った時、宗門非常事態收拾対策委員会が活発化するともに、再び「求道聞法」を柱に教学を真摯に学び直そうとする動きが胎動した。それが各地に生まれる学習会であり、北海道教区では「教団問題協議会」が発足する。(速水 馨)